
BLACK D ● T

笹舟

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

BLACK D・T

【Nコード】

N9287Y

【作者名】

笹舟

【あらすじ】

『雨と地元を嫌っているテンション低めの女子高生』である主人公。いつものように雨に対して憂鬱を感じていたその日、とあることから『変な名前の』生徒会長と会話をすることになる。

「あ、大丈夫だよ。生徒会長の名にかけて、不純異性交遊なんてしないから」
そう言っただけの彼に手を引かれ、雨の降るなか連れて行かれた先は。

特別なことは何も起こらない、学生生活のちょっとしたお話です。
雨の日の暇つぶしにでもどうぞ。

●と私

BLACK D・T

マンガやドラマで、登場人物が雨に打たれて佇むシーンが出てくると、それがどんなに面白い話でも、途端にマイナスな気持ちが浮かんでくる。正直「馬鹿じゃないの」とさえ思ってしまう。私がそれらの話に登場するとしたら、戦いに敗れてどれだけ悔しさが募っていくとも、突然恋人に別れを告げられてどれだけ呆然としていくとも、雨が降り出したらすぐに屋根のあるところまで走るだろう。絶対に。

私は雨が嫌いだ。大、をつけてもいい。

雨についてのトラウマがある、なんて事情は無く、ただ純粹に雨を嫌っている。

朝起きた時に窓に雨が当たる音が聞こえてくると、まず軽く怒りが湧く。登校しなくてはいけない平日は特に、だ。そして靴や制服が濡れることを考えて憂鬱になり、ただでさえ低めだと友人から称されているテンションが下がる。

服や靴だけじゃない、雨になると手に持つ鞆だつて濡れてしまう。その鞆の中に本が入っている時なんて、最悪の極みだ。考えただけで嫌になる。私は自他共に認める読書家であり、ついでにいうなら学校では図書委員をしている。

大体、心から雨が大好きだという人はそうそう居ないと思う。

中学生の時のクラスメイトの中に「私、雨が好きなの」とか言っていた女子が居た。けれどその子だつて、帰り際に雨が降り出した時には「うわ……」と顔を歪めていた。その次に口にした言葉は「親に迎えに来てって頼もうかなあ」だ。

それ以来、雨が好きななどと公言している人を見かけると「それってキャラ作りじゃないの？」と心の中で思うようになった。

本当に雨が好きだという人だってそりゃあ居るかもしれないし、その人には私の考えは失礼だろう。でも、あの時にあのクラスメイトが満面の笑みを浮かべたりなんてしていても、それはそれでドン引きしていたと思う。距離的にも精神的にも確実に。

私の中では、雨が好きと言っていいのはゴキブリが好きと言っているのと同じぐらいだと思っている。極端な例かもしれないけれど、つまりはそれだけ考えが理解し難いということだ。恵みの雨だろうが何だろうが、嫌いなものは嫌いなのである。

ここまで宣言してきた通り、私は雨がとても嫌い。

それだというのに、私の地元では雨がよく降る。

だから私は、私の地元も嫌っている。見事な三段論法だ。

雨と地元を嫌っている、テンション低めの女子高生。

そんな私が、『雨が降る地元の商店街で』、という、あまり芳しくないシチュエーションで出会った店がある。出会ったというか、出会わされたというか、出会わせてもらったというかはとても微妙な境だけど。……それに何の因果だろうか、その店と出会うきっかけをつくった人物は、名前に『雨』という字を冠している人だったりもする。

——さて。

これは、その人とその店に出会ってからの私の話である。

雨と地元を嫌っているテンション低めの女子高生、つまり笠見颯子である私の話。

その私が、それからどうなったか。どうもなかったのか。月並みで三流、ありがちな言い回しだけど、

——それは読んでのお楽しみ、

ህጋዊነት

六月十日 くもり 時々 ●。

今日で雨へのマイナスイメージが更に上がった。

「最悪だ……」

私は鞆に入れていたタオルを取り出して、本を包んだ。

——今日は朝から曇り空だった。

午前中の降水確率は八〇パーセント。傘はこのあいだ壊れたばかり。今週から新しい靴を履き始めている。シャーペンの芯がもうすぐ無くなるけど、それを除けば今月欲しいものは特に発売されないので、財布の中には余裕がある。

普段は徒歩で学校に向かっている私は、今日はバスに乗ろうと決めた。

バスに乗ると決めたら、家を出るまでの時間に開きが出来た。その間に、先日母さんが買ってきてくれた本を少し読む。第一章がもうすぐで終わるという微妙なところで時間になったため、続きはバスの中で読もうと手に取ったままバス停に向かった。

私と同じような考えをしたらしい、バス停には何人かの制服姿が並んでいた。この辺りの住宅地には同じ学校に通う学生が多く住んでいる。

やがてやってきたバスに乗り込み、中央から前よりの席を確保、腰を下ろした丁度その時にバスの窓に雨粒が弾けた。それを皮切りに弱めの雨が降り始める。

家を出る時はまだ降ってきていなかったせいで傘を持つてくるのを失念していたことに気付き、しかしそもそも愛用の傘は踏んで壊してしまったところだったということに思い至る。うんざりとしながら、バス停から学校までの一〇〇メートルは走るしかないかと仕

方なく覚悟を決めた。

それからは、持っていた本へとすっかり意識を移して、その内容にのめり込んでいった。商店街の真ん中を走っている時に一度顔を上げた以外は、延々を活字に眼を通して過ごす。

停まる度に学生の増えていったバスが、学校に一番近いバス停（名前もそのまま北第一高校前である）に到着した時には、雨は小雨と呼べる程度にまで弱まっていた。

バスが止まると同時に学生が一斉に立ち上がる。手のひらに準備していた小銭を運賃箱に落として、バスから吐き出されていく。その列の中に揉まれるようにして私も降りた。

私がバスを降りて数歩歩いたとき、いきなり雨足が強くなってきた。

ほんの一〇〇メートルくらい、しっかりと抱えていれば大丈夫だろうとタカをくくって、私は手に本を持ったままだった。しかし激しくなってきた雨粒にこれは危険だと判断を変えた。

慌てて本を鞆の中に入れようと道の脇に立ち止まって、ステップから降りる勢いそのまま駆け出した学生とぶつかり、

——私は本を取り落としました。

思わず私は小さく叫んでしまった。「あ、悪い」と一言残して去っていった男子学生に眼は向けず、すぐに本を拾い上げる。指に伝わるふやけたような感触に、頭の奥が重くなる。

数秒だけ鞆に入れるか迷い、それよりもこれ以上雨に打たれないように、とぶつかった男子学生の後を追うように学校に向けて走り出した。走り出した頃には怒りが湧き上がっていたから、その学生が私の方をちらりとでも振り返っていたら、後ろを走る私の表情を見て「殺される！」とでも思っていたかもしれない。

急に立ち止まった私に非が無いとは言わないけど、でも、嗚呼……。

そして今に至り、怒りは哀しみに変化していた。

この時間になると、大体の生徒は登校し終えている。生徒玄関には、本の水気を吸い取ろうとその落とした本を包んだタオルにぎゅうつと力を込めている私の姿しかない。

「ああもう……。ほんとに……。最悪だ……」

ため息をついて、タオルを開いてみる。表紙はすっかり波打っていた。布製の文庫カバーでもしていれば良かったのだが、この本には紙のカバーさえかけていない。

母さんは本を買うときにカバーを断るタイプの人で、母さんが買ってきてくれたこの本もそれに違わない。曰く、「下手な店員がするぐらいなら、むしろ、してもらわない方がいい」らしい。それには私も賛成で、ただし「むしろ」の続きには「自分でする」がつく。だから書店でかけてもらわずにカバーを買って自分でかけているけど、残念なことに母さんはカバーをすることにこだわってはおらず、わざわざカバーを貰いはしない。

ふやふやになった表面を撫でて、その凹凸に悲しくなる。

何度目かの、最悪だ、を口にしようとした時、

「ああーもおー、そこそこ悪だーっ」

妙なことを叫びながら、アマガエルが飛び込んできた。

——いや、その雨合羽の色合いが見事にアマガエル色だったために、二秒くらいは本気でそう思ったけど、そのアマガエルは、入学してまだ二ヶ月しか経っていない私でも名前を知っている男子学生の姿だった。

理由は二つ、その男子学生は『変な名前』の『生徒会長』だからである。

六月十日 くもり 時々 ●。その2

この北第一高校、通称「北一」は、東高校と県で三番目争いを展開中の進学校だ。

ちなみにもう一つの北高校である北第二高校は、卒業後に就職を考えている生徒が半数を占める総合学科となっている。

しかし、県で三番目（or四番目）の進学校と言えど、北一はガリ勉が集まったテスト三昧の学びの舎、ではない。私がここに入學したのも、進学を考えてではなかった。

登校にわざわざ駅を超えるのが面倒だったこと、徒歩数十分の場合にここがあったこと、中学三年の時に担任から「北一はどうだ？」と提案されたこと、少々頑張ってみれば学力も何とかなりそうだったこと、学校説明に来た校長先生が良さそうな人だったこと、制服がそれなりに悪くなかったことが重なり、他の高校と並べて考えた末に、私は北一を選んだのだ。

ただしその「勉強漬けではない」というのは、今の私が北一に入りたての新生だから、そう感じているだけなのかもしれない。そこで話はちよつとだけ軸に戻る。

北一の生徒会長は、大体は二年生が務める。

三年になつたら勉強の日々、というのは、北一の一年・二年の生徒だけでなく、北一の教員もがよく口にする文句である。

北一では、三年生に進級すると、進学に向けての準備として委員会からも生徒会からも退会するのが、通例になっている（らしい）のだ。部活動は夏にあるそれぞれの大会が終わるまでは所属している（らしい）けど、生徒会長などの役も本人が希望しない限りそこで代替わりをする（らしい）。そして「今までそうだったから、なんとなく」というもの（らしい）とはいえ、通例をわざわざ破つ

てまで役を続けたいという生徒は少ない（らしい）。

すべて、伝え聞いた話によると、である。

これから二年先のことに、私はまだそこまで興味も実感も沸いていない。

で、ようやく本筋に戻るとするとこのアマガエル。――失敬、生徒会長。

彼は北一の二年生で、苗字は中谷といい、名前は雨に里と書いて『うり』と読む。その変わった名前を、新入生のほとんどは入学式から忘れたことが無いだろう。

入学式の歓迎の挨拶の時、彼の名前は呼ばれた。いつも眠たげな顔をしている教頭の「生徒会長、中谷雨里」という声がマイクを通して体育館に響いた途端、ステージの前に並んだ新入生たちと、後ろの方でパイプ椅子に座っている保護者たちの間には、

「うり？」「名前なの？」「うりって言った？」「読み間違い？」と、ちよつとした動揺と驚きの声がささめいた。

そんな中、壇上でスタンドマイクの高さを調整し終えた彼は、開口一番、

「変な名前だよね。でも、おかげで覚えてもらえやすいかな」

そう言つて、私たち新入生にニツと笑いかけた。

その後はポケットから紙を取り出して「新入生の皆さん。ご入学、おめでとうございます」と、その紙に書かれているのであろう、よくある言葉が並んだ文章を読み上げ始めたものの、第一声に新入生を歓迎する「ようこそ」でも、新入生を祝う「おめでとう」でもない言葉を向けられるとは思わなかった。

しかもそれが自分の名前を貶す言葉とは。

まあ本人の言うとおり、おかげで入学一日目にして、その名前は
ばっちりと私の記憶に刻み込まれたし、クラスメイトたちも、

「すごい名前だね」

「っていうか、ふつう自分で言う？」

と、インパクトを受けたようだった。

六月十日 くもり 時々 ●。その3

回想から思考を現在へと戻すと、中谷会長は雨合羽を脱ぎ始めていた。

その姿がアマガエルから学生へと変わっていくのを見ると、脱皮という言葉が浮かんだ。カエルは脱皮をしないけど。それくらいは知っているけど。

「あつれ。一年生？」

——気付かれた。

脱いだ雨合羽をばっさばっさと勢いよく振り、玄関の外に水滴を飛ばしながら中谷会長が私に尋ねる。露骨に眺め過ぎていたんだろ
うか。

私は頷いて答えた。

「一年です」

「もしかして、ロッカーの場所、わかんない？」

「あ、いえ」

北一では、生徒一人につき一つの縦長ロッカーが与えられている。更衣室などでよく見られる、無骨なスチールのよくあるアレだ。

生徒はその個人ロッカーに付属のスチール盤を掛け渡して棚状にし、体操服を入れておく、教科書をそこに納める、などと三年間活用する。鍵もついているため、登校中に聴いているMDプレイヤーなどの貴重品を管理しておくのにも便利だ。

しかし、ロッカールームには全校生徒分の同じロッカーがずらりと並んでいる上に、ネームプレートは付いていない。一年生のロッカーだけはクラスと出席番号の書かれたシールが貼ってあるものの、慣れるまでは探すのに一苦労だった。

「大丈夫です」

そう、一苦労、だった。

入学して二ヶ月経ち、ロッカーに教科書も体操服も保管しているのが常となった今では、さすがにロッカーの位置くらい把握している。一苦労、は既に過去形なのだ。

心の中ではそう思いつつも、それでも一応は「お気遣いありがとうございます」というつもりで、首を前に出す程度に頭を下げた。

中谷会長は雨合羽を振るのを止め、シューズを脱ぎ片手に持つと「だよねえ」と笑った。

「二ヶ月も経てば慣れるよねえ」

—— だったら訊くな。

置いていたスポーツバックを肩にかけると、中谷会長は二年の靴箱が並ぶ方へと足を進めていった。分からないと言ったら連れて行ってくれたのか、と何処か釈然としない気持ちを抱えつつ、ローファーを上履きに履き替えた私もロッカールームに向かう。今日の授業で使う教科書を二階の教室まで持つて上がらなければならない。

ロッカーの鍵を開けながら、もう一度本を撫でてみた。

それはもう乾いていたけど、濡れた表紙はやっぱり波打ったままだった。

長編の物語を文庫にしたものだから、ページは厚めで、値段もそれに比例して高めで、ずっと読みたいと思っていたけど手が出しにくくて、それを察した母さんが先日買ってきてくれた本だ。まだ、読み始めたばかりなのに。

「…… やっぱり最悪だ……」

諦めきれない思いを口に出した瞬間、

「勿体無くない？」

今まで視界に無かった鮮やかな色がぬっと現れて、思わず仰け反った。

「最悪って、『最も悪い』だよ。『悪い』の中での、『最も』。一

番悪いんだよ。ショックの原因が何なのかは知らないけどさ、今『最も悪い』って表現を使っちゃう？」

ああ。アマガエル色だ、これ。

「人生は結構長いよ、たぶん」

変な名前の中谷会長は自分で頷きながら笑った。——自分の考えを懸命に説明してくれたんだろうけど、そうですか、としか私には思えない。

驚いたことに、私と中谷会長のロッカーは隣同士だったらしい。

私のロッカーが一年列の折り返しの場所であり、右隣からは二年専用のロッカーだということは知っていた。だけど誰の物なのかは今まで知らなかったし、興味も無かったから知ろうともしていなかった。……でも今日のために知っておくべきだったのかもしれない。アマガエルの出現で驚いてから、未だに私の動悸は治まってない。

雨合羽を抱えた中谷会長は「隣？」と私のロッカーを見て一度眉を上げ、自分のロッカーの鍵穴に鍵を差し込んだ。その鍵についていたストラップもカエルだった。

「あ、でもさ、英語の例文で『第九は音楽界で最も有名な曲の一つだ』とかってあるよね。最もって、いくつもあってもいいってことかな。どうなんだろう」

生徒会長は思い出したようにそう言いながら、開いたロッカーからはプラスチックのハンガーを取り出した。そのハンガーに雨合羽をかけると、教科書類を出すことなく、またロッカーに鍵を閉める。そして「ね？」とこちらに視線を向けた。

いや、そんなの私に訊かれても。

そう思いながらも、当たり障り無く、気になるところですねとだけ返して私は自分の教科書を取り出した。すぐにロッカーを閉める。「じゃあね、授業頑張って」

「……どうも」

別れ際までフレンドリーな人だ。きつとたくさんの友達が居るんだろう。

でも、私にとってこういう人は、正直対応に困る相手だ。学年が違えば、あまり顔を合わせることもない。一言の会話もしないまま、どちらかが卒業することだってある。例えば部活動などの関わりあう機会が無ければ、「先輩」と「後輩」の関係ってそんなものじゃないだろうか。

そして私は、今日まで中谷会長と話したこともなかった。それなのに、朝、玄関で顔を合わせただけの後輩にあれだけ親しく接するとは。

この学校の生徒会長は、名前だけでなく、性格もちよつと変なのかもしれない。

そんなことを考えながら、ロッカールームを離れて足早に廊下を歩いた。

一応断っておくけど、別に中谷会長から逃げようと思ったんじゃない。

とろとろしているとホームルームに間に合いそうになかったからだ。

六月十日 くもり 時々 ●。その4

「……あ、」

記憶を巻き戻してみれば。

登校のバスで一度だけ顔を上げた時、商店街の歩道にあのアマガエル色を見た気がする。

そんなことを思ったのは、三時間目の生物の授業中で、

「ここ重要だからね、まずはここから押さえていこう！」

担当の教員が大きくカエルの図をホワイトボードに描いた時だった。

そのカエルの発生をマスターしたところで、私はいつたい将来何に使えるのだろう。

窓の外、勢いは弱くとも未だ降り続いている雨に、意識せずとも溜息が出た。

*

私の怨みが届いたのか、嬉しいことに昼過ぎには雨が止み、放課後には曇り空から晴れ間が見えた。

これなら歩いて帰れそうだ。私は早々と支度を終えると、すぐに教室を出た。

「颯子、真っ直ぐ帰るの？ 今日図書室行かないんだ」

「降らないうちに帰る。部活頑張ってる」

廊下ですれ違った友人に手を振って、私は階段を降りる。

進学校である北一は、部活動は強制ではない。

入学前は何部に入ろうかと本気で悩んでいた。毎日放課後に練習

するほど好きな運動も無いし、だからといって文化部の中に興味をそえられるものも無かった。しかし、入学して程なくそのことを知り、「あ、いいんだ」と拍子抜けした私は、悩むのをすっぱり止めた。

つまり、部活動には入らないことにしたのだ。

だから私の放課後といえば、部室棟に向かう友達に手を振りながら図書室に向かうか、グラウンドを走る運動部を眺めながら帰路につくか、という悠々としたものである。

だけど、今日は少し勝手が違った。

「あ、朝の人だ」

『朝の人』ってどうなの。ハムの人みたいな。

教科書を抱えてロッカーに向かうと、中谷会長が雨合羽を取り出しているところだった。どうも朝と同じように頭を下げ、その隣に並んで、鍵を開ける。

「最悪だーって言ってた、朝のショックは消えた？」

「……………」

——忘れてた。

ぶり返してきた悲しみと怒りが、それを思い出させた中谷会長に自然と向かう。

軽く睨みつけるようにして生徒会長に目線を向けると、それに気付いていない様子の彼は、弱ったような顔をしてむくれていた。人の眉が本当に八の字になると、初めて見た。

「俺も今日ちよっとツイてないことがあつて。朝からテンション下がるよねー」

そういえば、と思う。

玄関に飛び込んできた中谷会長は、「そこそこ悪だ」という謎の言葉を発していた。そして中谷会長は今、朝から不運な目にあった

と言っている。

今朝、彼は「最悪だ」と使うのが勿体無いから「そこそ悪だ」と言ったのだろうか。

ああ。――……変な人だ。

靴を履き替えて玄関を出たのが、またもや丁度、中谷会長と同じだった。

「よく会うねえ」

「……そうですね」

今日は朝から中谷会長づくしだ。中谷会長大放出の、中谷会長デラしい。嬉しくない。

帰り道まで同じ向きらしく、私と中谷会長は商店街へ続く道を歩く。

私と中谷会長の歩調も似たようなもので、いきなり早く歩くのも何だかだし、速度を落とすのも何だかだしで、成り行きのまま、二歩ほど離れた微妙な距離をあけて私は中谷会長の後ろを歩いた。

この地域は、商店街が多い。

中でも、鷹据駅を中央として大体で言えば四方に伸びている商店街は大きなもので、この辺りでは大路と呼ばれている。

元々の名前は「駅北商店街」「駅東商店街」「駅南商店街」「駅西商店街」というそのままの名前だが、住人には「北大路」「東大路」「南大路」「西大路」という呼び名の方が一般的である。呼び名のように特に大きな通りという訳ではないが。

そしてこれは地元住人である私には不思議なのだが、何故か、電車で北一に通っている鷹据外の学生の方が、商店街を「大路」と呼ぶことにこだわっている。大阪にやって来た田舎者が関西弁を喋りたくなるような心境だろうか。

……ちよつと違うか。

私が登校時、そして下校時に通るのは、その中の北大路だ。

左右には飲食店やスポーツショップといった店が軒を連ねているけど、あまり注意して見たことは無い。登校時も下校時も、歩くことに専念しているからだ。

それに、この辺りで大きな商店街の一つとは言っても、私が北大路で買い物をする時といえば、気が向いた日の帰り道に、次の日のおやつ用のパンを小さなスーパーで買うくらいだ。東・西・南でもそれは同じで、行くことが多いといえるのは東大路の入口（駅に近い方として考える）付近にある、三階建ての本屋が唯一である。

まだシャッター街とまでは行かないけど、大路に陰りが見えてきているのは確かだ。

私はそれが寂しいような、でもそれも当然なような気持ちで受け止めている。だって私にはこの大路への思い入れなんて、そんなに無いのだ。

六月十日 くもり 時々 ●。その5

「あ」

短く声を上げ、すぐ前に行く中谷会長が足を止めた。

思わず私も足を止めてしまう。

振り返った中谷会長は私の顔を見て、何か言いたげな顔をしながら考え込み始めた。

ちよつとだけ無視していこうかとも思った。でも、中谷会長が私から眼を離さないのもそれも実行しづらい雰囲気だ。

ようやく何かを決めたらしい中谷会長が、口を開いた。

「……えーと、朝の人、さん」

名前が分からないなら正直に訊け。

「笠見颯子です」

「あ、ごめん。笠見さん」

軽く頬を掻き、その返しに自分も名乗ろうとした彼に、中谷生徒会長ですよねと先を越してやった。私が名前を知っていたことに、中谷会長はちよつと嬉しそうな顔になって、そうそうと頷いた。

自分から「変な名前だから覚えられる」って言ったでしょう、約二ヶ月前に。

「笠見さん、傘持ってきてる？ 折りたたみでも」

「持ってきてないです」

「降るよ、これ」

これ？ どれ？ いきなり何だ？

主語無しで断言した中谷会長の表情は、

「雨……ですか？」

「うん。家は、もう近い？」

「あと十五分くらい歩きます」

「あー、じゃ困ったね。あと三分くらいで降ってくるよ、雨」

「……困りますね（あなたへの対応に）」

それでも迷いの無いものだった。

「家までに十五分かかるなら、確実にその道中で降り出しちゃうね」

「じゃあ早く帰らないと」

中谷会長の言葉を鵜呑みにした訳ではない。

だけど本当に雨が降るというのなら、今のうちに帰りたい。こんなところで立ち止まっていけないで、早く歩を進めたい。

だからそこを退けてください、とそんな気持ちを込めて中谷会長を見据える。あなたが私の目の前に立ちはだかっているせいで、進もうにも進めないんです。

でも、眼と眼で通じ合うー、なんて無理な話だった。

「よし。笠見さん、雨宿りして行こう」

相手はフレンドリー過ぎる生徒会長。彼は想像以上の強者だった。

「あまやどり……」

「うん、すぐそこにぴったりのトコがある。丁度、今日寄る予定だったし」

意味の分からない、いや、意味は分かるけどそれが今の流れで登

場する理由の分からない単語を呆然と繰り返す。雨宿りに私を誘う理由が何処にあるというのだ。

私は降らないうちに家に帰りたい。用事があるなら一人で行ってください。

だけど対する中谷会長はとても上機嫌で、当然ながら私の、帰りたいという意思なんて届いていないに違いなかった。

とはいえ、私にだって断る権利はあるはずだ。

「……すいません、私」

「あつれ、三分保たなかったねえ」

ぼつつ、ぼつぼつ。ざーざー。

中谷会長が空を見上げた瞬間に、一体どんな仕組みなのか、と疑いたくなるようなタイミングで強い雨が降り始めた。思わず呆気にとられる私をよそに、中谷会長はごく自然に私の手を引いて商店街の歩道を小走りで進む。

「あ、大丈夫だよ。生徒会長の名にかけて、不純異性交遊なんてしないから」

ため息が出た。

あなたのその生徒会長という肩書きに、どのくらいの重みがあるというの。

六月十日 くもり 時々 ●。その6

私は社交的な性格ではない。

というか、事なかれ主義だ。だから友人は別として、自分から人に関わっていくようなことはあまりやりたくない。朝感じたとおり、先輩で、今まで話す機会も無くて、何の接点も無かった相手、私の真逆であるフレンドリーな中谷会長に対応するのには、困る。

それでも私が中谷会長に大人しくついていったのは、諦めがあったからだ。

結局、帰るまでに雨が降ってきてしまったし、この強雨の中を傘無しで歩く気にはならないし、中谷会長の気が済むならいいか。と。

そもそも全ての物事にバタフライ効果働いているというのなら、

今こうして雨宿りに向かっているのは、帰り際に中谷会長に声をかけられたからで。

帰り際に中谷会長に声をかけられたのは、朝出会っていたからで。朝出会ったのは、私が本を乾かしていたからで。

本を乾かしていたのは、バス内で読んでいた本を落としたからで。バス内で本を読んでいたのは、家を出るまでそれを読んでいたらで。

家を出るまでそれを読んでいたのは、時間があつたからで。時間があつたのは、バスに乗ることを決めたからで。

バスに乗ることを決めたのは、雨が降る道を歩きたくなかったからで。

雨が降る道を歩きたくなかったのは、私が雨を嫌っているからで。

現在のこの状況の起因、それは私の雨嫌い。

もうこれは私の本能と呼べるものとまでになっている。諦めるしかない。

この『雨宿り』の先が、良い方、悪い方、どう連なっていくのかわからない。だけど何故か漠然と、中谷会長との繋がりはこの先も切れることが無い気が、既にこの時からしていた。

その時には、とつても、嬉しくなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9287y/>

BLACK D ● T

2011年12月5日21時50分発行